

編集後記

21世紀という新しい時代の幕が開いたにも関わらず、時代を表すキーワードは「混沌」と「模索」だと言う。

これまでの高度成長を求め、効率性を重視する社会経済システムは崩れ、その目標に向かって進んできた人々の価値観もゆらぎ、混沌とした、先が見えない状況が続いているとする時代認識だ。この時代にあって、私たちは新しい道を自らの知恵で模索してゆくことになる。また、一方では「個の時代」が到来したとも言われている。「組織があって人がいる」のではなく、「人がいて組織がある」とする考え方だ。ここにも価値観の転換が見て取れる。このことは、単にこれまでの主客が逆転したに留まらない大きな変革をもたらす。

今回の「北陸の視座」は、そうした時代認識から東京大学大学院教授「武内和彦氏」、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター所長「公文俊平氏」のお二人にご講演いただいた。

武内氏は、地方分権化は、地域の真の力が試される大競争の時代の到来を意味するとした上で、「中山間地は、見方を変えれば、自然の豊かさに満ちあふれた地域である。現状が同じでも、価値観を変えれば、評価も変わってくる」と地域の個性を活かす知恵が必要になることを強調され、「北陸は多自然居住地域を目指し、一つの地域の中で、経済、エネルギー、環境をバラバラに考えるのではなく、産業の有機的な結びつきを考え、地域の資源を複合的に組み合わせた循環型の社会システムを形成し、さらに都市と農村が連携し、中核都市が受け皿となって、広がりを持った国際交流を推進していく視点が必要ではないか」と示唆された。

公文氏は、情報化は経済力を増進する産業化とは質的に違うとした上で、「これまでの国家あるいは企業とは違う、独立した個人対個人の関係が成立し、共通な目標を実現するコラボレーションの輪がインターネットを使い広がっていくだろう」と予測されている。「今、北陸は、地域の特性に応じた情報インフラを、自らの力で戦略的に整備していく時期ではないか」と提言された。

地方の時代は、「集中ではなく分散」の時代である。それは、先ず国に支援を求めただけでなく、地域で考え、責任を持って実現に向けて歩いていく"自立"を意味する。その後、依存という関係ではない、自立した地域同士が共同作業をする「分散から始まる新たな連携」へと進んでゆくだろう。

「北陸の視座」が、混沌とした時代の地域づくりを真に模索する皆さんの一助になれば幸いである。

(北陸の視座 編集事務局)